

グリム昔話論 [3]

- 昔話におけるインセスト・モチーフ -

大 崎 隆 彦

1. はじめに

昔話の傾向を、日常生活の様々な側面を取り扱った民間伝承的なものと、魔法・呪い・変身など非現実的な出来事を取り扱ったいわゆるおとぎ話的なものに大別するならば、後者のほとんどは何らかの形で愛をテーマにしたものであると言えるだろう。そしてそのような愛の物語には、一般的な異性間の恋愛だけではなく、親子・兄弟姉妹など近親同士の愛もまた頻繁に描かれている。ここでの愛は、探索の旅に出かけたり、勇敢な行為を成し遂げたり、パートナーを窮地から救い出したりする原動力になったりする。グリム兄弟編『子どもと家庭の昔話集』(以下『グリム童話集』と略す)¹⁾にも、こうした愛を描いた話が60篇以上含まれている。ただし昔話の常として、その愛は普通は直接的に語られるのではなく、行動や身振りの形で表現されたり暗示されたりする。『グリム童話集』に収められているこの種の愛の物語は、ほとんどがそれ以前の例えばジャンバッティスタ・バジレーやシャルル・ペローの昔話集に収録されていた話を下敷きにし、場合によっては改作したものであるが、これらの中には親子間-特に父娘間-、あるいは兄弟姉妹間-特に兄妹間-のインセスト的愛情をモチーフにしたものが少からず含まれている。²⁾ グリム兄弟は自分たちの童話集を世に出すにあたって、収集した原話(原資料)に多くの場合変更の手を加えたが、その際最も神経をとがらせたのは性的なものの描写、特に近親間のインセスト的関係のそれであった。³⁾ 例えば原話の段階でいくつかのヴァージョンがあると、兄弟は常に、インセスト的欲望が表面に出ていないものを選ぶか、あるいは選択の余地がない場合、そのシーンを改変するか削除するかした。ただしKHM65『千匹皮』のように、インセスト・モチーフがその物語の論理と展開にとって極めて本質的な部分を構成すると見なした場合には、さすがにそれを削除することはせず、その代わりにそうした関係と状態を批判するコメントを登場人物の口から語らせるという方法をとった。しかしこれはあくまでも例外である。(この話については次章で詳述する。) いずれにせよ、主に弟のヴィルヘルム・グリムが長い年月をかけて-1812/15年の初版

から1857年の第七版（決定版）まで－入念に改変の手を加え、すっかり童話集から取り除いた（かに見える）インセスト的関係の描写が、注意深く読んでゆくと、『グリム童話集』に収められた多くの物語にいまだにその痕跡を留めていることがわかる。

当稿ではまず『グリム童話集』の中のインセスト的关系をモチーフとして取り扱っていると思われる話を、父娘間の異世代インセストと兄妹間の同世代インセストに分類し、その状況と展開、さらにはその禁忌がどのように描写されているかを検討したい。そして最後に、口承の時代からバジーレやペローなど昔話収集出版の先駆者たちを経て、近代のグリム兄弟の時代にまで、なぜインセストとその禁忌が昔話のモチーフとして綿々と語り継がれてきたのかという問題を、ジークムント・フロイトの『トータルムとタブー』及びクロード・レヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』を手がかりに、民俗学的ないし文化人類学的視点を交じえて解明してゆきたい。

2. 類型Ⅰ－異世代間インセスト

異性の親子の愛を媒介とする心情的なつながりを描いた昔話は数多くある。その際父親と娘の親密な関係を取り上げることは珍しくないが、母親と息子のそうした関係が描かれることはほとんどない。つまり娘に対する父親の愛や嫉妬に焦点を当てた話は昔話（恋愛おとぎ話）の型として確立しているが、息子に対する母親の愛情というテーマについては必ずしもそうではない。一般に恋愛おとぎ話では、若者が相手の娘に対する自らの願望を成就させようとする、その娘の父親が割り込んできて反対したり干渉したりする場合が多い。そしてその際注目すべき点は、この父親と娘の関係に、無邪気さを装いながらも明らかにエロスの要素が暗示されていることである。

KHM127『鉄のストーブ』“Der Eisenofen”の父親は、娘の結婚の約束を彼女と共謀して反故にしようと試みているかのようなのである。王である父親が自分の娘の約束した相手が鉄のストーブであることにショックを受けるのは当然として、それ以上にこの父娘は強い愛の絆で結ばれていると思われる。特に娘の方からの父に対する思いは強い。なぜなら娘は、自分の婚約相手は実はストーブそのものではなく、その中に閉じ込められた、ある国の王子と名乗る若者であることを、父親に告げていない。娘の王女は、その若者との約束を守って結婚するように、と父王が言いだすかも知れないことを恐れたからである。娘がいまだに父親に強く依存している証拠である。話は結局ハッピーエンドに終わるが、彼女がやっと約束を果たして王子をストーブの中から救い出した後、まず家に帰って父親と話したいと言いだすところなどにも、父親と娘の間の心情的な

がりの強さがうかがえる。

KHM111『腕利きの猟師』“Der gelernte Jäger”においても、父王と娘の王女の間に特別な愛情が通い合っていることを示す描写が出てくる。この物語も結末では父親の祝福を受けて娘は幸せな結婚をすることになるが、そこに至るまでの過程が興味深い。城の塔の中で深い眠りについているヒロインの王女を、強欲な大男たちが略奪しようとしたとき、タイトルになっている主人公の若者が救出するが、その際その証拠として彼が持ち返ったものの中に、父王と王女の間のエロスのともいえる深い愛情を暗示する品が二つ含まれている。一つはベッドの下にあった上靴で、片方には父王の名前が、もう一方には王女の名前が記されている。もう一つの品は大きなスカーフで、これにも右端には父王の名前が、左端には王女の名前が記されている。また猟師の若者は控えの間で王の名前がついた剣を見つける。若者はこの剣を使って大男たちを倒すことになるが、そばのテーブルの上に一通の手紙が置いてあり、それには、この剣を手に入れる者はどんな相手でもその前に現れるものの命を取ることができる、と書いてある。父王はやがて花婿となる者に自分の娘を救い出させるお膳立てをしていたと考えられる。つまり父王は、その求婚者が誰であれ、自分の身代わりとして同一化しようとしていたに違いない。さらに奇妙なことに、深い眠りについていた王女は肌着の中に完全に縫い込まれている。このことは、自分の娘が助け出される時辱めを受けないようにという、父王の心づかいを示している。若者は父王の望み通りの役目を果たし、王女の肌着をほんの少し切り取っただけで満足し、その場を立ち去る。その際彼が三つの品、すなわち、剣と右の上靴とスカーフの右半分を持ち帰ったことも、自分と、王女が盲目的にせよインセスト的つながりを感じている父王とを、無意識的に重ね合わせていたことをほのめかしている。なぜなら、肌着は言うに及ばず、上靴もスカーフも王女が直接身につけるものであり、それらはエロスの親密さを表わす象徴のようなものだからである。なおグリム兄弟は童話集の注釈において、この話はツヴェールンのドロテア・フィーマン（『グリム童話集』の原話の語り部として有名な女性の一人）からの口承より採用した旨を述べた上で、次のような別のヴァージョンも紹介している。「……彼（猟師）はさらに中へ進み、第三の部屋へとやって来る。そこには王の娘が眠っている、しかも素裸で。彼は証拠としてテーブルの上にあった首飾りと指輪とハンカチーフを取り、それから彼女のそばに横になる。彼が立ち去るときも彼女は眠りつづけ目を覚まさない。やがて時がたって彼女は相手が誰かわからないまま妊娠していることが発覚する。激怒した父親は娘を牢屋にぶち込む……」⁴⁾ グリム兄弟がこの類話を採用しなかったことは言うまでもないが、ここには娘に対する父親のインセスト的欲望がより鮮明な形で表れている。

以上二つの話では、父親の娘に対する純粋な父性愛に、時として邪悪な嫉妬心が入り込んでく

る場面が描かれていた。しかし『グリム童話集』の中には、娘に対する父親の気持ち、あるいは結婚しようとする娘に対する父親の行動が、常軌を逸している話がある。KHM113『王さまの二人の子ども』“De beiden Königskinner”では、娘たちを溺愛する父王が花婿候補の王子に嫉妬して、とんでもない条件を出す。娘の一人と結婚したいのなら、彼女の部屋の中で9時間、つまり夜の9時から朝の6時まで、寝ずに起きていなければならない、というのである。父王がこのような奇妙な要求をしたのは、こうすれば王子は娘と性的欲求を満たすことができなくて悶々とするに違いないと考えたのであろう。娘を奪おうとする男に対する父親の嫌がらせである。しかし娘たちはそれぞれ、部屋に置いてあった聖クリストッフエルの石像を用いて、まんまと父親をだますことに成功する。父親の一時間ごとの呼びかけに答えるのを、王子の代わりにこの石像にさせ、王子は娘たちの部屋でぐっすり眠りながら父親のテストに合格する。もっとも彼が娘たちと性的関係を交わしたかどうかはどこにも書かれていない。ただ「入口のところに横になりました」と書かれているだけである。この話からもやはり、父親が娘たちに対して禁じられたインセスト的情愛を抱いていることが伝わってくる。娘たちの寝室に子どもの守護聖人である聖クリストッフエルの像が置かれているというのは、娘たちが欲望の誘惑に負けないよう、父親がその像に監視させているとも考えられる。

KHM31『手のない娘』“Das Mädchen ohne Hände”は一読した限りではインセスト・モチーフとは無縁の話のように見える。金に困った粉ひきの男が悪魔と契約を結ぶ。悪魔は粉ひきに莫大な富を約束し、その代わりに粉ひきは、自分の水車小屋の裏にあるものを何でも与えると悪魔に約束する。ところが家に帰ってみると、契約を交わしたちょうどその時に水車小屋の裏にたまたま自分の娘がいたことを知り、粉ひきはびっくり仰天する。三年後に娘は悪魔のものになってしまうというのである。しかし彼女は信心深かったため、両手切断という犠牲はあったにせよ悪魔から解放される。つまり悪魔は約束を結局果たさなかった父親に無理やり娘の両手を切断させたのである。ここで理由はまったく説明されないまま、彼女は切断された両手を背負い、幸せを求めて世の中へ出て行こうと決心する。父親は、何不自由のない生活を約束すると言って引き止めるが、彼女の決心は変わらない。以上がこの物語のあらすじである。ところがグリム兄弟はこの話の注釈で次のような事実と言及している。「ツヴェールン出自の話(もう一つの類話)にはこの導入部がなく、父親が自分の娘を妻に望み、娘が拒否すると、父親は彼女の両手(そして両乳房)を切り落として、白いシャツを着せて、世の中に放り出す。」⁵⁾この類話の方が、冒頭の部分について言えば、娘の旅立ちの動機は明確で論理にかなっている。つまり娘は理由なしに自分の意志で家を出て行くのではなく、父親に結婚を迫られ拒んだため、両手と両乳房を切り取られて

しまい、それが理由で家を出る。結局グリム兄弟は、このテキストのつじつまの合った一貫性を認めながら、導入部のインセスト・モチーフを削除し、悪魔との契約というあまり衝撃的でない無難な話に置き換えたのである。

以上見てきた話では、父娘間の近親愛というテーマは、インセストがタブー視されている倫理的状况を踏まえ、完全に削除されるか、またはヴェールに包んだ表現で慎重に扱われてきた。ところが次に取り上げる KHM65『千匹皮』“Allerleirauh”では、『グリム童話集』における唯一の例外として、インセスト的關係がそのまま直接的に描写されている。妻を失ったある国の王が、実の娘と結婚したいという決して許されない願望を抱く。臨終の床で妻は、自分と同じくらい美しい女性が見つかるまでは再婚しないしてほしいと言い、王はそれを約束する。王の約束は確かに妻への永遠の愛を表明したものであるが、後になって、亡き妻と同じくらい美しい女性は自分の娘しかいない、だから自分の娘と結婚するのだ、という自分の主張を正当化するものともとれる。しかしもう一方で、娘が大人になるまで王が亡き妻と同じくらい美しい相手を見つけられなかったことは、彼が自分の娘に対して密かな情愛を抱いていた証拠ともとれる。いずれにせよ、娘と結婚したいという王の言葉を聞いて側近たちは肝をつぶし、「父親が自分の娘をめとるのは神さまが禁じておられます。そのような罪深い行いからは善いことが生まれたためしがございません。このお国までが捲きぞえを被って滅びてしまいます」⁶⁾ と言って王を諫める。娘の方も父王のともない企てを思い止まらせるために策略を巡らせるが、それを見ると、父親が自分に寄せる思いの激しさを密かに喜んでいるところがある。彼女は父の求婚を受け入れる条件として突拍子もない要求を出す。それはまず三枚のドレス - 太陽のように金色のもの、月のように銀色のものと星のように輝くもの - であり、次に国中すべての動物の毛皮を少しづつ集めて作った外套（これが話のタイトルになっている）であった。この要求は、彼女が、どのくらい自分を愛しているかを示すようにと、無意識の内に父親に求めているかのようなものである。恋愛おとぎ話の常として当然この願望は満たされるが、そうになると娘は父王のもとから逃げ出すより他に道はなくなる。こうして父王は、娘を失うことによって、自分の罪深い欲望が罰せられると同時に、物語の舞台から消える。

ところでこの話は、初版と第二版以降の版とでは、微妙なしかし重大な点で異っている。父王に求婚された娘は城を逃げ出して森に身を隠し、やがてその森の所有者である王に見せめられて結婚することになるが、初版ではその森の所有者は文脈から見て他ならぬ自分自身の父王であり、しかもその王と、つまり自分の父親と娘は結婚することになってしまっている。グリム兄弟はさすがにこれは好ましくないと考えたのか、第二版以降の版では、その森の主は別の国の王とし、

従って最後に結婚するのは自分の父王ではなく、他の国の王ということにして、父娘間のインセスト成就を回避している。ここでしかし、グリム兄弟は『手のない娘』では原話にあったインセスト・モチーフを完全にカットしたのに、『千匹皮』ではそうしなかったのはなぜか、という問題が残る。兄弟は注釈でこの話の類話としてペロー『ロバの皮』やバジール「ペンタメローネ」の中の『雌熊』などを挙げている。⁷⁾ 他にもヨーロッパの長い物語史において、父が娘を妻に望むインセスト・モチーフは古い伝統がある。⁸⁾ 従って性的モチーフをできるだけ避けようとしたグリム兄弟でさえ、民間に深く浸透しているこのテーマを自分たちの童話集にも収録せざるをえなかった、と考えるのが妥当であろう。⁹⁾

3. 類型Ⅱ - 同世代間インセスト

『グリム童話集』には、あまり知られていないが、兄弟・姉妹-特と兄妹-の間の愛情を描いた話がかなりある。数の上では前章の類型Ⅰの話を超えと言えらる。これらの物語の典型的なパターンは、妹が結婚適齢期に入るところから始まり、いくつかの苦難を双方の忠誠と献身によって乗り越え、最後に妹がめでたく結婚し、兄(たち)は妹とその夫と共に末永く幸せに暮らす、というものである。

KHM47『ねずの木の話』“Von dem Machandelboom”では、有名なKHM15『ヘンゼルとグレーテル』と同じように、幼い兄妹の無垢な献身ぶりが描かれている。ただしここでは二人は異母兄妹ということになっている。そしてやはり邪悪な継母が登場し、最後には処罰を受ける。兄にとって妹の愛情は、彼を出産したあと喜びの中で死んでいった実母の代償であり、同時に兄に対する母親-兄の継母-の冷酷な仕打ちは、妹の中に潜在的な母性本能ともいえる愛情を目覚めさせる。継母に殺された兄はやがて美しい鳥になって甦り、彼女に復讐するが、その前にこんな歌を歌う：「母さんはぼくを殺した/父さんはぼくを食べた/妹のマリアが/ぼくの小さな骨を集めて/絹の布に包んで/ねずの木の下に埋めてくれた/クイー、クイー、ああなんときれいな鳥だろう、ぼくは」。¹⁰⁾ ここには慈悲深い天使のような妹の行為に彼が心から感動している様子が描かれている。また鳥(=兄)が妹のために一足の赤い靴をプレゼントするが、そこには兄の妹に対する恋愛にも似た感情が暗示されている。最後は鳥が石臼を継母の上に投げ落とし、彼女がたたきつぶされると同時に鳥はもとの兄の姿に戻り、ハッピーエンドとなる。

KHM141『子羊と小さな魚』“Das Lämmchen und Fischchen”に登場する兄と妹は、魔法を使う性悪の継母に、それぞれ小さな魚と子羊に変えられてしまう。なおこの章で取り上げる話に

は、兄妹の片方または両方ともが動物に変身させられるという筋書きが多い。このような二人を隔てる生物学的な境界は、インセスト^{タブー}禁忌の比喩的表現と位置づけることができるだろう。この物語は極めて意味ありげな結末を迎える。兄妹は別の善良な魔女によって人間の姿に戻してもらい、「それから女（魔女）は二人を大きな森の中へ案内し、小さな家に連れて行きました。この家には他に誰もいないので淋しいのですが、二人は何不足なく幸せな日々を過ごしました。」¹¹ これはまるで、この兄妹は結婚して末永く幸せに暮らした、とでも言わんばかりである。

兄妹型の話には双方が性的に引かれ合っていることをほのめかすものも少なくない。KHM25『七羽のからす』“Die sieben Raben”では、特に妹の側の性的感情が見え隠れしている。妹は、自分の出生のとき洗礼の水を汲みに行った七人の兄たちが壺を井戸に落としてしまい、怒った父親からずに変身させられて家を追い出されたことを、のちに成長してから知る。妹は兄たちを捜すため果てしない旅に出るが、この旅の途上で起こる魔術的な出来事は、彼女の兄たちへの思いの深さを暗示する。最後に兄たちの救出方法を教えてくれるのが、美・恋愛・豊饒の女神ヴィーナス（アフロディテ）の星といわれる明けの明星（金星）であったり、からすにされた兄たちの住むガラスの山の入口を、妹が自分の小指を切り取って開ける場面などは、彼女の思慕のエロスの性質を象徴している、という指摘もある。¹²

KHM9『十二人の兄弟』“Die zwölf Brüder”もやはり前話と同じく、兄たちのからすへの変身と人間への復帰が筋の中心をなしている。十二人の息子をもつ王が、十三人目の子が女の場合は、息子たち全員を殺して女の子に国を継がせると言う。これを知った王妃は息子たちをこっそり森に逃がす。やがて女の子が生まれ、美しい娘に成長したある日、偶然兄たちの存在を知り、彼らを捜す旅に出る。妹は森の中の魔法の家で兄たちを見つけ、みんなで楽しく暮らし始めるが、彼女が庭の百合の花を十二本摘んだとたん、兄たちは十二羽のからすとなって飛び去ってしまう。この謎めいた変身も、兄たちと共に暮らす妹の潜在意識の中に禁じられたインセスト的欲望があって、それに対する罪の意識が投影したものと考えられる。兄たちを救うために七年間の沈黙を強いられた妹の王女は、森に狩りにやって来たどこかの国の王に見初められて結婚する。しかしその沈黙ゆえに姑に訴えられて火刑に処されそうになったとき、ちょうど七年が経過し、十二羽のからすが飛んで来て次々と兄の姿に戻り、妃である妹を救出する。最後には邪悪な姑は処刑され、妹とその夫の王と兄弟全員がいっしょに死ぬまで仲よく暮らす。ここで重要な点は、兄たちは妹の結婚後でなければ人間の姿に戻れなかったことである。つまり兄たちのからすへの変身は、妹の禁断の愛の対象を結果的には彼女から引き離したことを意味し、妹が別の男と結婚してその危機が去ったとき、兄たちは再び人間の姿に戻って妹のところへ帰ってきたのである。

KHM49『六羽の白鳥』“Die sechs Schwäne”もこの話の類話で、妹のインセスト的欲望の回避が、兄たちの変身の隠れた理由であったことを暗示する場面がでてくる。

KHM11『兄と妹』“Brüderchen und Schwesterchen”は、そのタイトルが示すように、この種の兄妹型物語の典型的な一例である。この話もまた、兄の変身を阻もうとしたり、子鹿に変身させられた兄を人間の姿に戻そうとする妹の献身的な愛を描いている。そしてここでもやはり兄が人間の姿に戻るのには、妹が結婚して子どもを産んだあと、つまりインセスト的危機が去ったあとのことである。しかしその段階になっても妹の兄に寄せる思いは他の何よりも強く、二人は誰はばかることなく同居生活を続け、それで妹は兄といっしょに幸せに暮らして世を終わりました、という形で話は終わる。

『兄と妹』のように、兄が意図したか否かは別にして、妹に結婚相手として王子を引き合わせ、それによって無意識的にしろインセスト的関係の危機を回避するという話が他にもある。つまり兄が妹の縁結びの役割を演じるという話であるが、時には兄が明らかに意図的にそうする場合もある。ただしそんな場合でも、兄は妹の結婚後も妹夫婦と共に暮らしてゆく。例えばKHM57『金の鳥』“Der goldene Vogel”がそうである。金の鳥を捜しに旅に出る三人兄弟の内の「できがわるい」とされる末っ子の王子を、一匹の狐がなぜか辛抱強く助け、最後に美しい王女と結婚できるようにしてやる。このなぜかの答は、物語の結末でこの狐が実は王女の兄の変身姿であることが明かされることで、はっきり示される。すなわち狐となった兄の行動の原動力は、単に人間の姿に戻りたいという欲求だけではなく、当初から、自分の妹を結婚させて妹夫婦といっしょに暮らすことによって、正々堂々と妹との共同生活を続けたいという目的意識でもあった。なぜならこの物語もやはり、彼ら(兄と妹とその婿王子)の幸福は生きながらえている間になに一つ欠けるものはなかった、という結末で終わっているからである。この物語でも、兄が狐に変身した理由についてはまったく触れられていない。このことは、兄の内面に生じた、年頃の娘となった妹へのインセスト的感情からくる危機感と関係があり、従って兄は妹と別れなければならない必然性を感じていたことをほのめかしている。そうした欲望を暗示する次のような描写が出てくる。狐が末っ子の王子に王女を連れ出す作戦を授ける場面で、狐(=兄)が覗き見の妄想をかき立てるように言う：「夜になって辺りがひっそり静まりかえると、美しい王女さまは湯浴みをしに湯殿へ行きます。そこで王女さまが湯殿に入ったら、あなたは王女さまにとびついてキスしなさい。そうすれば王女さまはあなたについて来ます。」³⁹⁾ この作戦は狐(=兄)の口から生々しく語られ、それはあたかも自分が実際に試した、あるいは試してみたいことを話しているような印象を受ける。ところでこの物語で、兄が狐から人間に戻るためには、撃たれて頭と手足を切りおと

されるという過酷な条件を満たさなければならない。この刑罰のような条件にも、妹に対してインセスト的欲望を抱いていたことへの罪悪感が投影されている。さらにこの罪償いのための処罰を実行するのは妹の結婚相手に限るという条件も、兄が罪の自覚と精神的浄化を必要としていることを示している。しかし見方によっては、この兄は、自分が十分に恩を売った男と妹を結婚させることで、その後の人生を愛する妹と共に送ることにまんまと成功した、とも言える。

KHM163『ガラスの柩』“Der gläserne Sarg”も前話と同様に兄が妹の結婚の仲介役を務める話である。この話でも兄は動物（雄鹿）に変身させられるが、ここでは前話と違って変身の経緯が説明されている。突然やって来た見知らぬ客が、妹を自分の花嫁にしたいがために、兄に魔法をかけたからである。しかし話の筋立てと展開は『金の鳥』の場合とそっくりである。見知らぬ客が兄妹の家に現れるのは二人が共同生活を始めてしばらくしてからであり、結末で二人が再びいっしょに暮らせるようになるのは、兄が妹の救済者で後に花婿となる貧しい仕立て屋の男を連れて来た結果である。従ってここでも、最初の見知らぬ客の役割には、魔法で兄を雄鹿に変身させたり、妹を囚われの身にしてしまうところから、この兄妹がお互いの潜在意識の中に抱いていたインセスト的情愛に対する罪の意識が投影されていると言えよう。この物語りの語り的手法は少しばかり風変わりで、妹自身がガラスの柩の中から、自分がそこに閉じ込められたいきさつを、後の夫となる救済者の仕立て屋に話して聞かせるというものである。この話の中にも、妹の兄に対するインセスト的感情を象徴的に、時には具体的に表現した箇所がいくつかある。例えば妹が仕立て屋に語る場面で次のようなせりふがある：「わたしたち兄妹はそれはそれは仲がよくて、ものの考え方も好みもそっくりでしたので、二人とも結婚しないで死ぬまでいっしょに暮らして行こうと心に決めたぐらいでした。」⁴⁰ ここには兄妹間の愛の絆がはっきり表現されている。あるいは、妹への求婚を断られた客が、兄に対する仕打ちとして翌朝兄を狩りに誘い出し、雄鹿に変身させてしまう場面は、客が、自分の求婚が受け入れられないのは妹の兄に対する強い愛着のせいだ、と考えたことを表わしている。結局この話も、兄と妹が潜在意識におけるインセスト的感情に対して罪悪感を覚え、兄が雄鹿という変身姿のまま妹の救済者（＝結婚相手）の仕立て屋の男をさらって連れて来ることによって、罪の意識を克服し、同時に人間の姿に戻って妹夫婦共々めでたしめでたしとなる。

KHM135『白い花嫁と黒い花嫁』“Die weiße und die schwarze Braut”においても、兄の妹に対する献身的な愛情が描かれている。ただしこの物語で変身するのは例外的に妹の方で、兄の尽力で人間に戻ってある王と結婚し、兄にも高い身分が与えられる。また前章で取り上げたKHM31『手のない娘』も、グリム兄弟の先駆者の一人とされるバジールレの『ペンタメローネ』

[三日目・第二話]に収録された同タイトルの類話では、妻を亡くした兄の、自分の妹と結婚したいという常軌を逸した理不尽な愛情を描いた話となっている。¹⁵⁾

こうして見てくると、兄妹間のインセストをモチーフにしたと思われる話が『グリム童話集』には意外に多く収められていることがわかる。グリム兄妹は、既述したように、自分たちの童話集を編集出版するにあたって、収集した原話資料を入念にチェックした。その際特に性的モチーフを含んだ話には神経を使い、場合によってはそういう内容を削除したり、場合によっては穏便な形に改作した。それでも、程度の差こそあれ、インセスト・モチーフを含む話がこれほど多く収録されたということは、口承書承を問わずヨーロッパの昔話の伝統において、この社会的にタブー化された近親間の性的関係への興味と関心がいかに深いものであったかを示している。

それでは次に、インセストの歴史とその禁忌^{タブー}の由来について、民俗学的ないし文化人類学的視点から若干の検討を加えてみたい。

4. インセストの原風景とその禁忌^{タブー}の由来

ジークムント・フロイトは『トーテムとタブー』(1912-13年)の最終章で、インセスト禁忌^{タブー}の由来に関して次のような仮説を展開している。フロイトは、チャールズ・ダーウィンが提起した原始的群(Horden)の説-高等猿類の生活習慣から推定して人間もまた初めは小さな群をなして生活していた-に基づいて、人類の原初期に強権的な父による集団内の女の独占があったと仮定する。この群から追い出された若い男たちは、兄弟集団を作り、父を遠巻きにして羨望するしかなかった。やがて父が老い衰えはじめると、兄弟集団は一致団結してその父を殺し、恐怖の対象であったその強大な力を取り込むために、死体を切り刻んで生で食べてしまう。これがいわゆる「原父殺し」である。しかし羨望と恐怖の的であった父を食べることによって同一化した兄弟たちは、悔恨の念にかられ、殺害した父を哀悼し、二度とこのような悲劇を繰り返さないために、トーテミズムという機構を作り、そこで同胞種族を形成した。これがトーテム共同体の起源である。そこで彼らは、兄弟のうち誰か一人が再び父の座を占めることがないように、同胞種族内の母や姉妹を占有することを断念した。つまりかつて息子たちが犯した原父殺害の罪悪感こそが、同一トーテム種族内での男女の性交を禁じ、外婚制をとることになった根源的理由である。¹⁶⁾これはまたキリスト教神話における原罪の起源ともなる。そして人類はこの原罪を原点として社会共同体を形成し、人倫の道を歩みはじめたとされる。

ここでもう一つ、「タブー」「Tabu」という言葉の問題について付言しておきたい。フロイトは

同書の第Ⅱ章で、この“Tabu”というポリネシア起源の言葉について次のように指摘している。「我々にとってタブーの意義は二つの相反する方向に分かれている。一方では『聖なる』“heilig”とか『清められた』“geweiht”を意味し、もう一方では『無気味な』“unheimlich”, 『危険な』“gefährlich”, 『禁じられた』“verboten”, 『不浄な』“unrein”などを意味している。……従ってタブーには『遠慮』“Reserve”という概念に似たものがついてまわり、実際にもタブーは禁止や制限という形をとって現れる。我々にとっての合成概念である『聖なる禁忌』“heilige Scheu”がしばしばタブーの意味するところと合致するのであろう。」¹⁷⁾つまり「聖なる」という語意の根底には、人間はより大きな共同体の利益のために自分たちの性的自由や倒錯の自由の一部を犠牲にしてきた、という歴史的認識が存在している。そしてインセストを邪悪なものとして嫌悪する背景には、インセストは反社会的であり、文化の本質にとってこれは断念されなければならない、という了解事項がある。

クロード・レヴィ＝ストロースは『親族の基本構造』(1947年)において、フロイトの理論を批判的に継承発展させ、インセスト禁忌を人間の自然から文化への移行及び断念の共有と位置づける。すなわち「インセスト禁忌以前にまだ文化は与えられていない。インセスト禁忌と共に自然は人間のもとに至上の支配力として存在することをやめる。インセスト禁忌とは自然が自己を乗り越えるプロセスである。インセスト禁忌の起こす火花の働きによって新型の、より複雑な構造が形成される。この構造はいちだんと単純な心的生活の諸構造を統合しつつそれらと一つになる。同時に、これらの心的生活の諸構造もいちだんと単純な動物生活の諸構造を統合しつつそれらと一つになる。インセスト禁忌は新しい秩序を到来させる。インセスト禁忌それ自体がその到来である」¹⁸⁾。そしてこの統合的な心的構造は親族関係の形成と密接に関わる。親族関係の形成を親子関係と婚姻関係という相互補完的な二つの軸の統合ととらえるならば、この心的構造は、選択の余地のない生物学的条件を基にした親子関係ではなく、本来自然的に決定されるのではなく自由でありうる配偶者選択の領域に基づくものでなければならない。なぜなら本来自由な選択が可能だからこそ規則が介在し、それがあつた統合作用を発揮しうるのである。¹⁹⁾ こうしたインセスト禁忌の位置づけから出発すれば、彼の親族構造論はおのずから、配偶者選択＝婚姻関係を基軸に組み立てる方向に向かう。ここがフロイト理論との基本的な違いである。つまり社会関係の形成を、フロイトは〈欲望－禁止－抑圧〉という系列からとらえたのに対し、レヴィ＝ストロースはそれを〈自由－規則－交換〉という系列からとらえる。そして禁忌という否定的な了解事項には、実は家族以外の者と婚姻せよという肯定的な命令、すなわち外婚制の規則が暗黙の内に含まれていることを、彼は指摘する。こうしてインセスト禁忌が〈私が妻を得ることができるといふこと

は、結局のところ(妻の)父親や兄弟が彼女を断念したという事実の結果である」という交換原則と一体の現象として現れてくるのである。

レヴィ＝ストロースはさらにここで親族関係における重要な指摘をしている。それは多くの原始社会に観察される「母方オジ」の独特な地位をどう理解するか、という問題である。「母方オジ」とは、子どもからの呼び名であるが、男の配偶者(妻)の兄弟のことである。この母方オジは姉妹の息子(オジからすると甥)と独自の親密な関係をもっていることが報告されている。²⁰⁾ インセスト禁忌が普遍的に課せられている人間社会の条件のもとでは、男が結婚相手の女を獲得するには、これを別の男から譲り受ける他はなく、後者の男は女を自分の娘あるいは姉妹の形で前者の男に譲り渡す以外にない。従って親族の構造はまず配偶者としての女の授受から生じる構造として立ち現れてくる。そしてこの関係が成立するためには、男はお互いに近親の女を自らの結婚相手としては断念し、他の男から譲渡されることを期待するしかない。こうした男たちの「断念」の共有が女の交換の成立を可能にし、〈一人の男／その妻／その妻の兄弟／その婚姻から生まれた次世代の子〉という四者の関係から、新たな「親族の原子」が構成される。

『親族の基本構造』の理論的考察から導き出される要点は、インセスト禁忌を人間という生物における自然と文化の接点、または自然から文化への移行の契機として位置づけるという点である。言い換えれば、すべての人間に共通する普遍的なものは生物としての人間の〈自然〉に属し、制度とか規則は〈文化〉ごとに多様性を示すが、インセスト禁忌は、普遍的に観察され、しかも規則の中で際立った規則としての性格を帯びている点で、〈自然〉と〈文化〉の交差点に位置していると言えるだろう。²¹⁾

5. むすび

『グリム童話集』には様々なタイプの家族同士の愛情をテーマにした話が収録されているが、その中でも父娘間あるいは兄妹間のインセスト的愛情をモチーフにしたと思われる物語群がひときわ異彩を放っている。グリム兄弟が提示しようとした道徳的な理想としては、親子間であればそれは純粋な家族愛であるべきだし、兄弟姉妹間であれば互いに助け合い支え合う献身的な愛でなければならない。そうしたひたむきな愛情は性的欲望とは無縁であるべきで、少なくともそのような欲望を動機とするものであってはならない。しかし現実には、父娘間や兄妹間の愛情にはとかく性愛的な要素が忍び込みやすいという社会・歴史的な認識があるからこそ、程度の差こそあれインセスト的關係をモチーフにした物語が数多く存在する。またフロイトやレヴィ＝ストロー

スの研究成果は、そのような社会・歴史的認識を、人類の幼年期にまでさかのぼって裏づけている。なかでも兄妹間の物語で興味深いのは、二人が思春期に入ってからで、兄妹がお互いを救う行為は妹の結婚相手を見つけ出すことと密接に結びついている。これらの話では一般に、兄と妹はなんらかの危機が原因で家を離れ、二人で森の中で暮らす内に大人になる時期が近づいてくるが、二人がそのままの形でいつまでも共同生活を続けることは許されない。そこで魔法による変身という事態が生じ、普通は兄が動物や鳥などに変えられることによって、妹との間に生物的・物理的な壁が築かれる。この壁は、レヴィ＝ストロース風に言えば、インセストを回避させる役割を果たすと同時に、「交換せよ」という命令を発する積極的な役割も担う。その証拠にこの壁は、妹が結婚したとたん、つまり交換が成就するや否や、呪いをかけられたときと同じように驚異的な形で消滅する。ここで変身するのがなぜ妹ではなく兄の方なのかという問題が生じる。それはおそらく、残る方の兄が動物とか鳥の姿になってもさしつかえないが、交換の対象として嫁に行く妹は人間の姿をしていないと困るからである。

またインセスト的關係にある兄妹型の話では、何よりも重要なのは妹を早く結婚させることであるから、兄自身が縁結び役を演じる話があっても不思議ではない。そういう場合、妹が納得し、結婚後も義兄 - 後に生まれてくる妹夫婦の子からみれば「母方オジ」 - との同居を受け入れることに同意した男なら、相手の選り好みはしない。(KHM163『ガラスの柩』など) ただし妹のための縁結び役を務める兄は、大ていの場合変身させられた動物や鳥のまま行動しなければならない。このことは、レヴィ＝ストロースの指摘にもあるように、インセスト禁忌が〈動物 = 自然〉と〈人間 = 文化〉の接点に位置し、その境界線上を行きつ戻りつする心的構造をもつことを象徴していると考えられる。

昔話“Märchen”という言葉は元々「知らせ、うわさ、話」などを意味する古ドイツ語の名詞“Mär(e)”から来ている。人類の夜明けの時代、まだ〈自然〉の状態にどっぷりついていた人間が、やがてインセスト禁忌という〈文化〉を獲得し、それを昔話“Märchen”という方法で後世に語り継ごうとしたとすれば、この種の昔話の起源は途方もなく古いと言わねばならない。

[後記：本稿は拙論『グリム昔話論 [1] - 昔話の起源』(「近畿大学教養部紀要」第29巻第2号)、及び『グリム昔話論 [2] - 昔話における糸紡ぎモチーフ』(「近畿大学語学教育部紀要」第5巻第1号)の続篇にあたるものである。]

[注]

- 1) 原著のタイトルは“Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm”。当稿では次の版を使用する。Brüder Grimm : Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit Originalanmerkungen der Brüder Grimm. 3 Bde. (Phillip Reclam, 1982) なお作品番号を引用する際はKHMと略す。
- 2) 用語(訳語)の使用に関して一つことわっておきたい。「インセスト」「incestum」というラテン語起源の用語をそのまま使用する理由は、「近親相姦」とするとどうしても性関係に限定されてしまうし、「近親婚」とすると制度としての婚姻における逸脱と理解されてしまうからである。
- 3) グリム兄弟の原話改作の方法と精神に関しては、拙論『グリム昔話論－昔話の変容』(『世界文学』95号, 世界文学会編, 2002年7月)及び『グリム昔話論－昔話の変容 [その2]』(同96号, 2002年12月)を参照されたい。
- 4) 注1)に同じ。Bd. 3, S. 204.
- 5) 同上。S. 69-70.
- 6) 注1)に同じ。Bd. 1, S. 351.
- 7) 注1)に同じ。Bd. 3, S. 127.
- 8) Enzyklopädie des Märchens. Hrsg. von Kurt Ranke (Walter de Gruyter, 1993) Bd. 7, S. 233-234.
- 9) 高木昌史『『千びき皮』(KHM65)の比較民話論－近親相姦モチーフを中心に－(『ドイツ文学』102号, 日本独文学会編, 37-39頁)参照。
- 10) 注1)に同じ。Bd. 1, S. 243.
- 11) 注1)に同じ。Bd. 2, S. 248.
- 12) James M. McGlathery : Fairy Tale Romance - The Grimmes, Basile and Perrault. (The University of Illinois Press, 1991) 邦訳: 鈴木晶他訳『愛と性のメルヘン』[グリム・バジール・ペローの物語集にみる] (新曜社, 1998年), 55頁。
- 13) 注1)に同じ。Bd. 1, S. 296.
- 14) 注1)に同じ。Bd. 2, S. 290.
- 15) Giambattista Basile : Il Pentamerone (1634-36) 邦訳: 杉山洋子他訳『ペンタメローネ』(大修館書店, 1995年), 217-225頁。
- 16) Sigmund Freud : Totem und Tabu. (Fischer Taschenbuch Verlag, 1995) S. 178-180.
- 17) 同上。S. 66.
- 18) Claude Lévi-Strauss : Les Structures élémentaires de la parenté. (Mouton & Co and Maison des Sciences de l'Homme, 1967) 邦訳: 福井和美訳『親族の基本構造』(青弓社, 2000年) 94頁。
- 19) 同上。99-103頁。
- 20) 同上。469-472頁, 515-518頁。
- 21) レヴィ＝ストロースの親族理論に関しては次の二次文献も参考にした。渡辺公三『レヴィ＝ストロース〈構造〉』(講談社, 1996年)第二章。